超短編①

「母求む」(20020715)

奇妙な募集広告だった。

「若いお母さん（３５歳位まで）求む。当方６０歳の男性。妻子あり」

広告を載せていたＡ新聞に、なんの広告ですかと電話で尋ねたが、直接広告主に聞いてくれとのこと。しかたなく、思い切って電話してみると、ちょうど本人が出た。話をした感じは、ごく普通のおじさんだった。翌日、会って話がきけることになった。

翌日の昼過ぎ、待ち合わせの駅前に、彼は時間通りに現れた。近くのファミリーレストランで話しを聞くことになった。

「妻子ある、いい歳をしたあなたが、お母さんを求めるっていう、あの広告は一体何ですか。私は皆目見当もつきません。」私は早速、疑問をぶつけてみた。

「私自身、一年程前に読んだ雑誌の記事に触発されたのです。」

６０歳で会社を定年退職したばかりのこの男の口から、とても興味深い話を聞くことができた。

彼の話は要約すると次のような内容だった。

誰もが名前を知っている某大企業に勤める、会社員Ｍがめでたく定年を迎えることとなった。

Ｍはあらためて自分の人生を振り返ってこう考えた。

自分は家庭においては良い家族、会社においては良い同僚に恵まれて本当に幸せだった。だけど、自分の人生には何かが欠けているとずっと漠然と感じていた。

いったいそれは何なのだろう。

ある秋晴れの日曜日、孫の運動会を観に幼稚園に行ったとき、Ｍは自分に欠けているものが何であるかをはっきりと理解した。

自分には楽しい幼稚園時代が無かったと。

確かに時代は戦中・戦後の混乱期だったけれど、友人の多くは幼稚園に通っていたではないか。

Ｍは運動会が終わるとすぐに園長先生に相談をした。もちろん、自分に入園の希望があることを。

園長先生は実に偉い方であった。Ｍの突拍子もない、かつ非常識極まりない話を園長先生は熱心に聴いてくれた。

「自分のところでは、現状では入園の許可は残念ですが出せません。だけど、何か良い方法がないか、考えてみましょう。」園長先生はそう言うと、実際それから色々とＭのために骨を折ってくれた。例えば、大掛かりなアンケート調査も実施してくれた。そして、それなりにニーズがあることもわかってきた。

結局、Ｍは翌年の４月から、一般の園児と一緒に入園することができた。

実は６０歳以上の中高年第一期生はＭの他にもう一人いた。ただ、一緒のクラスにすると純粋な幼稚園体験を希望する本人達に、かえって差し障りがあるだろうとの園側の配慮

により、二人とも別々のクラス、Mは「ヒヨコ組」に、もう一人は「小さなクジラ組」になった。
Mは一般の園児達と充実した幼稚園生活を送ることができた。
２年後の卒園式でMは卒園児代表として次のように答辞を述べ、皆から感動と祝福の盛大な拍手をもらった。
「幼稚園での２年間は私にとって真に素晴らしいものでした。まるで長い間みつからなかったジグソーパズルの一片が見つかったかのように、私の人生はこの幼稚園での２年間を埋め込むことにより完成したのです。」

なんという素晴らしい話だろうか。話をする彼自信が感極まった様子で最後には大粒の涙を流していた。私も最後は耐え切れず、人前も憚らずわんわん大声を出して泣いてしまった。お昼過ぎで賑わっている駅前のファミリーレストランは大変な状況になっていた。
彼は言った。「私の母は私を産むと間もなく病気で亡くなったのです。私は父の男手一つで育てられました。私には母の思い出が何一つないのです。」
私は涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔を拭きもせず彼に言った。
「全て理解しました。今からでも遅くはありません。あなたはあなたの理想とするお母さんをお探しください。」

私の言葉に彼は深くうなずいたのだった。

超短編シリーズはフィクションです。念のため